

が行き届いた。依怙地に見えるまでに頑固に自説を主張する時もあれば、さらりと流して知らぬ顔もした。赤裸々かと思へば飾り氣もあり、大人の振舞の間に多くの稚氣をも帶びて居た。かうした相反した陰陽兩性は、強弱多少の差こそあれ、大概の人の通有するところであるらしく、必ずしも濱田君に於てのみ認められるのではないが、これをおこういふ風に調整するかに於てそれゞゝの特徴が表はれ、個々の性質が規定せられるやうである。始終陽で陰を抑へつけて居るのが豪傑組であり、反対なのが薄弱組であり、適當に兩者をつきませて、陽に非ず陰に非ず、その中間を行くのが所謂中庸を得た常識の人といはれてゐるやうである。濱田君も詮じつめればこの中庸を得た人の部類に屬するのであらうが、然もその中庸は少しく毛色の異つた中庸で、常に陰陽の中道を歩いた人といふよりも或る時にはひどく陽に、或る時はひどく陰に走つて、その總和の上に於て中庸と計算せられる部類の人であつたと思ふ。尤も所謂常識の發達した人、中庸を得た人といふべき特徴も少からず持つてゐたし、特に晩年に於ては漸く圓熟の境に入つて、一般にかく認められ、自からもこれを以て任じたやうなところもあつたけれども、尙且つ世間謂ふ所の中庸の人との間には、可なりの距離を認めねばならなかつたと思ふ。いやにごちゞゝした、濱田君の最も好まなかつた書き振りに陥つてしまつた。以下かうした特徴を發揮した濱田君についての一三の思出話を書きつけて見よう。

學生時代から壯年時代を通して、始終濱田君は口にも筆にも論敵を作つて居つた人で、この頃には喧嘩相手なしには過されぬ人のやうにも見えた。誰も知る通り、夙くから文筆に優れてゐたので、高等學校では、『嶽水會雑誌』大學では『史學雜誌』の編輯に從事し、卒業後も學士委員として『史學雜誌』編輯主任の役目を引受けてゐた。